

岐阜農林事務所の普及活動状況 令和7年4月30日現在

今月の重点活動

■水稲 青空教室担当者研修会で情報提供

4月10日に岐阜市のJAぎふアグリパークにて青空教室担当者研修会が開催された。この研修会は、水稲青空教室を担当するJA営農担当者を対象として、田植時期を前に栽培品種の特性や本田初期管理のポイントについて理解を深め、今後各地で開催される水稲青空教室での説明で技術統一が出来るようにJAぎふが毎年開催している。当日は、JAぎふ、JA全農岐阜、岐阜農林事務所の関係者ら約80名が参加した。

岐阜農林事務所は講師を務め、水稲生育前半期の育苗及び栽培管理上の留意点について説明した。近年の猛暑の影響により、スクミリングガイ（ジャンボタニシ）の活動が活発化していることを紹介、「田植後3週間程度の浅水管理が被害軽減に効果が高い」と要点を伝えた。

今後も農林事務所では、JA営農担当者と連携し、令和7年産米の安定生産に向けて、肥培管理指導や現地調査を実施していく。

【研修会の様子】



(地域支援第二係)

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■担い手 女性農業経営アドバイザーが全体会議を開催（GLAMAいきいきネットワーク岐阜ブロック）

県では、農業経営に自ら参画し、地域活性化等に貢献する女性農業者を「岐阜県女性農業経営アドバイザー（通称^{グラマ}GLAMA）」に認定している。当所管内で活動するGLAMAいきいきネットワーク岐阜ブロックは、自らの資質向上を目的に、研修会や先進地視察等を実施しており、農林事務所はその運営等を支援している。

今年度の研修活動について検討するため、4月10日に第1回全体会議を開催し、3つの研修テーマごとの班に分かれ、研修内容や講師、視察先等が話し合われた。

各研修班から、販売やPR手法を学ぶための県外視察や従業員の健康確保のための研修等が提案され、組織活動を通じた経営・労務管理等の見直しに対する意欲の高さがうかがえた。

引き続き農林事務所では、組織活動の支援を通じて、女性農業経営アドバイザーが取り組む経営改善を支援する。

【会議の様子】



(園芸産地支援第一係)

安いで身近な「ぎふの食」づくり

■水稲 肥料低減に向け緑肥の生育量を調査

近年は肥料などの生産資材が高騰しているため、水稲栽培で使用する肥料使用量の低減を図ることを目的に、緑肥利用の取り組みが始まっている。

水稲の移植時期が5月中旬に予定されている圃場では、昨秋に緑肥としてヘアリーベッチを播種しており、JAぎふと協力し4月22日に生育量を調査した。今年の冬は平年並みの気温で推移したことから、暖冬であった前年より生育が遅いと考えられたため、生産者との事前打ち合わせで前年より10日遅く調査を実施した。調査結果をもとに緑肥で供給される窒素量を推定して、生産者に水稲の施肥量を提示した。昨年よりも緑肥の生育が良かったため、水稲の施肥量を減らして栽培を行う予定である。

今後、田植えに向けた作業が行われるが、生長したヘアリーベッチはそのままの鋤き込むと機械に絡まるため、一旦刈り取った後に鋤き込まれる。

農林事務所では、田植後から水稲の生育調査を継続して行い、収量や品質などを確認し、水稲作における緑肥の利用について検証を行っていく。

(地域支援第三係)



【緑肥生育量調査の様子】

■小麦「タマイズミ」 赤かび病対策の取り組み

当所管内では、水田を有効活用するための戦略作物として、パン・麺用途に向く小麦品種「タマイズミ」が、岐阜市・羽島市・山県市・本巣市・瑞穂市・北方町を中心に420ha 栽培されている。

安心安全な小麦生産には、小麦の開花時期に合わせた薬剤防除の実施により、かび毒の原因となる「赤かび病」の発生を防止する必要があるため、農林事務所は出穂状況に関する調査と防除指導を3月下旬から行ってきた。

今年の「タマイズミ」の生育は平年並で推移しており、出穂は4月9日に羽島市から始まり、管内の出穂ピークは4月15日～4月20日となった。現在、各生産者において「赤かび病」の防除作業が進んでいる。

今後、農林事務所は赤かび病の発生状況を調査するとともに、収穫時期に関する情報提供を行い、良質安全な小麦収穫に向けた指導を行っていく。

(地域支援第一係)



【小麦出穂の状況】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■かき 摘らい講習会

柿の摘らいは大玉果・高品質生産のために重要な作業の一つであり、毎年、4月下旬から各産地の振興会で摘らい講習会が開催されている。

本年の柿の生育は、ここ数年の高温状況下と比較すると、2月は気温が低く、4月の気温上昇が緩やかとなり平年並みの生育となった。実際の摘らい作業は連休明けが適期と予想される。

講習会では、農林事務所から今年の生育状況を踏まえた栽培管理、昨年猛威を振るったカメムシ等の病害虫防除のポイントを説明し、その後、実演により摘らいの技術支援を行った。参加者は熱心に説明を聞き、質問も多数寄せられ、大玉生産への意欲が伺えた。

農林事務所では、今後も主要作業の時期に合わせて開催される栽培講習会で技術支援を行っていく。

(園芸産地支援第二係)



【講習会の様子】

■いちご 「グリーンな栽培体系」の実践を支援

J A ぎふ管内の各いちご部会で構成している「グリーンないちご栽培研究協議会」では、令和4年度から3年間、農林水産省の「グリーンな栽培体系への転換サポート」を活用し、ハウスへの害虫の侵入抑制を目的とした防護壁の設置や害虫を捕食する天敵の放飼を行い、薬剤防除だけに頼らない新たな防除体系の実践に取り組んできた。

農林事務所では、事業に参加している生産者の圃場を巡回し、天敵・害虫の発生状況を調査している。今年は4月以降、気温の上昇とともに害虫の発生量も増加しており、薬剤散布が必要な害虫密度となっているハウスが増えているため、散布する薬剤の種類やタイミング等について助言している。収穫が終了する6月まで、発生状況の確認、薬剤散布の助言を行っていく。

3年間の取組みにより、害虫の侵入や発生量を抑えるための知見が得られたため、農林事務所では研修会を開催し、産地全体への新たな防除体系の普及を進めていく。

(園芸産地支援第二係)



【いちごの害虫の発生状況を確認】